

2010年度
卒業論文
要旨

氏 名

卒業論文タイトル

- 中村 尚樹 学校における環境教育—豊かな心の育成に向けて—
- 野島 裕志 日本の食と農—米文化の見直し—
- 野村 桂 豊かな人間関係を築くために～「知・徳・体」の教育を通して～
- 南 治香 環境教育の必要性—外なる環境と内なる環境をめぐって—
- 薮野 真理 カナダの自然環境と農業—日本の農業を考えるために—
- 李 優奈 音楽療法の意義—自己実現のために—
- 小寺 貴士 タバコ文化論～歴史と現在の喫煙意識を踏まえてこれからのタバコの文化論～

学校における環境教育

－豊かな心の育成に向けて－

中村 尚樹

<目次>

はじめに

第一章	環境教育の歴史
第一節	自然保護教育と公害教育
第二節	学校内における環境教育
第三節	学校外における社会教育
第二章	環境教育における教育観と体験の意義
第一節	ルソーの教育観
第二節	デューイの学校観
第三節	現代の環境教育への応用
第三章	豊かな心の育成に向けて
第一節	五感を通じた体験学習
第二節	自然体験活動の持つ意義 －センス・オブ・ワンダーの目覚め－
第三節	学校における「体験学習」 －豊かな心の育成にむけて－

おわりに

<要約>

近年、環境問題が深刻化し、このような問題解決のために、学校教育では環境教育が重要視されるようになってきた。環境教育について、実際の行動に結びつけていくためには、ものごとを様々な視点でとらえていく必要がある。環境問題の解決のためには、一人一人が、人間と環境とのかかわりについての理解と認識を深め、そして、環境に配慮した生活を送り、自分の問題として認識し、環境保全に努めることである。そのためには、人間と環境とのかかわりについての問題意識を高める工夫や身近な自然環境を教材とした体験学習を進めていくことが必要である。

私は谷口ゼミナールでのフィールドワークを通して、上記のような環境問題解決のために必要なことを、体験することができた。そして、この経験を今後の環境教育の実践にいかせないだろうかと思い、このテーマを取り上げることにした。

そして、子どもの豊かな心の育成に向けた体験学習の意義について考察し、環境教育を通じて、21世紀を担う子どもたちが心豊かな若者になれる環境作りに向けたよりよい方法を探っていきたいと思う。

日本の食と農—米文化の見直し—

野島 裕志

<目次>

はじめに

第一章 水田の現状と日本人の米の消費

第一節 水田の面積と変化

第二節 米の生産・消費と生産調整

第三節 日本人の食糧自給率と食糧輸入

第二章 食文化と環境の変化

第一節 気候変動

第二節 土壌汚染

第三節 日本の食文化の変化

第三章 米文化の復興

第一節 米作りの実践から

第二節 伝統的食文化の見直し

第三節 食べ物を無駄にしないための食育

おわりに

「食」と「農」、それは人間が生きていく中で基本となる要素である。その基本となる要素において、近年様々な問題が発生してきている。

戦後日本の主力産業が農業から工業やサービス業に移行し、日本の産業の構造は大きく変化、食の多様化に伴う肉食の増加に対応するため食料の海外輸入は大幅に増加した。このような変化は戦後の日本を豊かな国へと変えた要因であったとえる。しかし、こうした効率主義によって農業問題を考えることが食料自給率の低下をはじめとする様々な不安を生みだしていることも事実で、実際日本の食品自給率は40%まで落ち込んだ。近年、食料の国際市場は波乱の変化を見せており、大豆・小麦・トウモロコシの国際価格は2006年から2008年までの3年間で2倍以上に高騰した。国内の食料供給の大半を輸入に依存している日本にとってはその影響を直に被ることとなる。

このような現在の日本の食糧問題を考えるにあたって、この多くは現代人の生活が古くから伝わる米を主体としたものからかけ離れていったことから起こっているものではないだろうかと思いついた。食文化の変化から1600年代以降米の消費量は下降を続け、米余りのための生産調整は今なお続けられている。米食を増やすことはそのまま、自給率の増加につながる。今こそ、自国で生産された米を食べるべきなのである。

現代の食生活の変化は日本の発展の証であり、戦後目標として目指してきたものである。もちろん、ただ単にかつての生活に立ち戻ることをよしとするものではないが、経済的な豊かさを唯一の価値として、その他を見えなくしているようにさえ思える現代人に価値観を提示できないかと考える。かつてあった伝統的食文化の中に我々がいま求めるべきものがあるのではないだろうか。

また、食の安全を求める志向の高まりから、自分のゼミ活動として行った、もち米の無農薬有機栽培の体験を通して、無農薬栽培について考え問題解決の糸口を模索した。雑草の除去にかかる手間は農業として考えるならば、とても実用はできないことを痛感した経験であったが、「出来ないこと」を身をもって理解することにより、残された道に希望を持つこともできた。

現在は失われてしまっているかつての日本の伝統的な食文化を振り返り、その良さを再評価し、我々一人ひとりがその食生活において取り入れる工夫をし、実践するならば自給率低下をはじめ、健康・環境の問題をも解決することができる可能性を秘めている

豊かな人間関係を築くために～「知・徳・体」の教育を通して～

野村 桂

<目次>

はじめに

第一章 日本の教育

第一節 教育の定義

第二節 日本教育の歴史

第三節 日本教育の問題点

第二章 学力世界一の教育～フィンランド教育から考える～

第一節 フィンランド教育とは

第二節 フィンランドの教師と授業風景

第三節 フィンランドと日本の教育効果の違い

第三章 豊かな人間関係を築くために

第一節 知育と学校教育

第二節 徳育と環境教育

第三節 体育とスポーツ教育

おわりに

<要約>

「近頃の若者にはモラルがない。」と一般的に言われるようになってしまった。同じ若者として情けないと思う反面、この評価を事実として認めなければならないのが現状である。しかし、その評価を下している人たち（大人たち）が我々を育て、教育してきたのである。だからと言って今の大人たちを責めるのではなく、我々若者が将来、自分たちの子供の世代や孫の世代に対して今の大人たちと同じ評価を下さないために、良き人間の形成のためには、「知・徳・体」のバランスの取れた教育をする必要がある。このような考えはすでに教育者の中では浸透しているだろう。では、教育者ではない一般の人たちはどのようにして子供たちに対して教育という意味でのアプローチができるだろうか。

例えば、私はここ4年間子供たちにサッカーの指導をしてきたが、そこは教育者ではない私が唯一子供たちと接することのできる場所だった。そこでは、サッカーのこともサッカー以外のことも子供たちに伝え、指導し、子供たちが日に日に成長していくのを感じた。

学校教育だけではなく、一般の人たちが色々な形で子供たちとコミュニケーションを取り、教育していくことも、子供の教育という意味では重要なのである。今日、教師不足が囁かれるが、一般の人たちが積極的に教育に携わるべきなのではないだろうか。

環境教育の必要性—外なる環境と内なる環境をめぐって—

南 治香

<目次>

はじめに

第一章 環境とはなにか—2つの環境—

第一節 環境の定義

第二節 外なる環境

第三節 内なる環境

第二章 外なる自然とその権利範囲

第一節 公害問題—水俣病を中心に—

第二節 環境権とその範囲

第三節 人間中心主義か生命中心主義か

第三章 内なる自然と環境教育

第一節 心の環境

第二節 ライフスタイルの変更

第三節 環境教育の必要性

おわりに

<要約>

「ひと」は何に、どのような影響を受け、日々過ごしているのでしょうか。「ひと」という存在を考える際に、その日々の決断に影響を与えている環境を切り離して考えることはできない。第一章では、環境とは何かについて考えてみたい。環境という言葉の意味は広く、私たちが生活する場所、人間関係、心の状態までも、環境という言葉が包括している。本論文では、環境を大きく2つに分けて定義している。「外なる環境」と「内なる環境」である。「外なる環境」とは、「ひと」の外側を取り囲み、今現在を生活している人々に共通して、必要な自然的環境である。「内なる環境」とは、「ひと」の内面を取り囲む心の環境である。「外なる環境」である自然環境は、「内なる環境」に強く影響する。災害などが起こって、周りの環境が急激に変化した場合、人は心の環境にも影響を受ける。それと反対に内なる環境である心の環境が変われば、人の行動も変わり、自然環境にも影響を及ぼす。この2つの環境は互いに影響し合っていると考えられる。すなわち、自然環境を守りたいと考えるのであれば、人間の「内なる環境」、つまり心の環境を豊かにする必要がある。その心の環境を豊かにするためには「外なる環境」、つまり自然環境の問題について考えてみることが不可欠である。

しかしながら、我々はこの「環境」をないがしろにし、自分たちの今現在の生活を重視しすぎているのではないかと思う。第二章では、外なる環境である自然環境について公害問題である水俣病に焦点を当てながら考えていきたい。さらにそれを基にして、どこまでの生命が環境に対する権利を持つのかを環境倫理を用いながら考えていく。

第三章では、第一章と第二章で考察した「環境」を守っていくために「内なる環境」について考える。また、その上で、環境教育の必要性について考えていく。私は、幼いころから、豊かな心を持ち、自然を慈しむことのできる人を1人でも多く育成することで、ライフスタイルの変更ではなく、最初から、自然を自分の一部だと考え、行動するライフスタイルを形成することができるのではないかと考える。そのために必要であると考えられるのが、環境教育である。これは今の時代を生きる上で、自分と他を大切にすることにつながる。

カナダの自然環境と農業—日本の農業を考えるために—

藪野 真理

<目次>

はじめに

第一章 カナダの自然環境

第一節 カナダの自然

第二節 カナダが目指す自然保護先進国

—バンフ国立公園を訪れて—

第三節 カナダの自然と環境問題の現状

第二章 カナダの農村と農業

第一節 カナダの農村と農業の歴史

第二節 カナダ(オンタリオ州アズボーン)の農業

第三節 農業・農村の活性化への展望

第三章 カナダから考える日本の自然と農業

第一節 日本の自然—里山との共生—

第二節 持続可能な農業と環境教育

第三節 カナダを参考に日本の農業を考える

おわりに

<要約>

2010年8月、私は1ヶ月間カナダのビクトリアとバンクーバーに滞在した。その時カナダの大自然を実際に目にし、私の想像力と好奇心を大いに刺激した。日本で見慣れた観光地の風景とは異なる、人間がつくったのではなく長い時間をかけて変化し続けてきた、山や川、湖がそこにはあった。しかし、遠いカナダの森で起こっている原生林の伐採や、失われる生物多様性などに、私たちは気づいていない。そのことが、私たちに無関係な出来事であるかということ、そうではないと思う。私たち人間の生活は日々快適になっているが、環境問題が悪化していることは、現実問題である。

農業の面では、カナダと日本の両国が共有するものと日本に固有なものを、農村地域活性化の方向性や課題について見てみる。自然との共生を目指した農業の復興の手段として環境教育の必要性がある。幼い頃から日本の自然と農業に関心を持たせ、そのために体験学習を通して、自然の原体験を刻み込ませ、自然の価値観を培うことが大切であると感じた。

音楽療法の意義

—自己実現のために—

李 優奈

<目次>

はじめに

第一章 音楽の存在と意義

第一節 音楽の起源と目的

第二節 人間の発達に込められたリズム

第三節 音楽がもたらす心理的効果

第二章 自己実現へ到達する手段としての音楽療法

第一節 音楽療法が果たしうる社会的機能

第二節 音楽療法の教育への導入

第三節 自己実現のための音楽療法

第三章 宗教音楽にみる音楽療法

第一節 宗教の誕生背景と基本的教義 —キリスト教、イスラム教、仏教—

第二節 グレゴリオ聖歌、コーラン、お経 —音楽的観点からの特徴と比較—

第三節 宗教音楽の比較分析に基づいた創作音楽

おわりに

<要約>

テクノロジーの進歩によって、私たちが実際に他者と関わる機会は減少し、自己における他者存在が希薄化している。人間関係の希薄化と同時に、他者による自己存在の受容の機会の減少が招かれ、私たちの社会は生きる指針を見出しにくい社会へと変容していると考えられる。

音楽は古代、コミュニケーション手段としての発話の役割を担っていた。言語の発達に伴い、その本来の役割は、神や自然といった神秘的な存在とのコミュニケーションの手段として役割を変えていったと考えられている。時を超え、音楽は消え失せることなく、現代の私たちの生活において必要不可欠なものとして存在している。私たちは、この世に誕生する前から、母親の胎内で母親の話し声や心臓の鼓動を聞き、誕生後も心臓の拍動、脈拍といった、リズムを介在させた体内活動を営んでいる。この体内活動と音楽の「リズム」という共通項による結びつきが、現代まで音楽が存在している理由と関係していると考えられる。

自己が社会の一員として目標を持って生きるためには、今、他者といかに関わり、自己と他者の持つ世界を互いに擦り合わせるかということが問われている。自己と他者が接点を見出し、対話を行う場所として、さらには、自己の発想や創造力が尊重されることを実感する手段として、音楽療法を実践する意義について考察している。

第一章では、音楽がどのような経緯で誕生し、私たちに音楽的感覚や効果をもたらしているかについて論じた。第二章では、音楽療法の実践を社会における「対話の場」に見立て、自己実現を目標とする創造力の育成という観点から考察する。最後に第三章では、国や文化を超越し、精神性の共有を図ることを可能とする宗教音楽を3種取り上げ、それらの持つ音楽的特徴について分析、比較したうえで、楽曲製作を行った。

タバコ文化論

～歴史と現在の喫煙意識を踏まえてこれからのタバコの文化論～

小寺 貴士

<目次>

はじめに

第一章 タバコの起源

第一節 タバコの歴史

第二節 タバコの種類

第三節 コロンブスによるタバコの伝来

第二章 日本のタバコ文化

第一節 タバコ伝来

第二節 徳川時代のタバコ

第三節 タバコの役割の変容

第三章 インタビュー調査

第一節 インタビューからみる喫煙・分煙の意識

第二節 インタビュー調査の考察

第四章 インタビューを通してのこれからの分煙・禁煙

第一節 学校における分煙・禁煙

第二節 将来のタバコの役割

おわりに

<要約>

現在社会においてタバコの役割は、ストレスの発散やコミュニケーションのツールとしての役割を担っている。しかし、これは、歴史的に見ると大きく変わっている。タバコの起源は、古代マヤ文明にまで遡り、そのときのタバコの役割は神との交信手段として用いられている。更に、コロンブスによってヨーロッパに伝来したときには、薬として伝来しており医療的分野で大きな役割を果たしていた。そして、南蛮貿易によって日本に伝来した。その時には、ファッションとして当時の日本人に伝来している。このように、歴史的観点から見ただけでもタバコの役割は大きく変わってきているのである。

そして、喫煙意識について、喫煙者と非喫煙者の両者の意見を考えて今後のタバコの在り方は、分煙という形で残っていくであろうと考えられる。現在でも分煙を行っている飲食店は多数存在しているが、受動喫煙やタバコの臭いを完璧に分離しているとは言い切れないのが現状である。このまま分煙は進んでいくことは間違いないと思われる。喫煙できる店は非常に少なくなると考えられる。更に現在の健康志向などを考えると喫煙者の人数などは非常に少なくなると推測できる。しかし、喫煙者がなくなることは無いと思われる。なぜならば、健康志向や経済的なことよりもタバコのもたらすストレス発散の方が大切であると考えられる人はいると考えられるからである。

以上を踏まえて考えると、タバコという存在は、今後も忌み嫌われる存在となると考えられる。しかし、喫煙者が誰にも迷惑をかけない喫煙が重要になると私は思う。